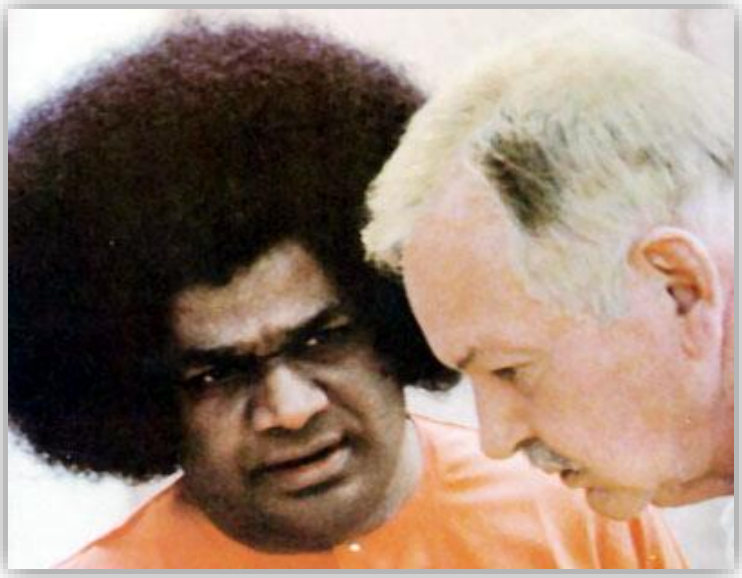

『私のババと私』

ジョン・S・ヒスロップ博士　著

ババによる命の奇跡

1978 年の 10 月にブリンダーヴァン〔バンガロール近郊のホワイトフィールドにあるババのアシュラム〕で就寝中、何の前触れもなく、突然、私の前立腺が尿道を遮断した。それから起こったことは苦悶そのものだったが、にもかかわらず、とてもコミカルだった。午前 8 時頃、ババが居室から降りて来られると、私はババに、私の尿道が塞がって膀胱がはちきれんばかりに膨らんでいます、と伝えた。スワミはにっこり微笑んで、心配しないようにおっしゃり、ヴィブーティをくださった。午前 11 時頃、ババが新しい建築物の視察から戻り、ベランダに現れると、ゴールドスティン博士と私はババに近づき、私の症状はきわめて深刻なもののように思われると伝えた。ババは私に近づき、私の目をのぞき込むと、頭をポンポンと軽く叩いて、心配しなくてもそれは熱に過ぎない、とおっしゃった。そして午後 4 時、ババはふつう休憩後に下へ降りて来られるのだが、私は待ちきれずに 2 階へメモを送り、症状はどんどん悪化しており、今や体中あちこちに激痛が走っている、と伝えた。ババは即座に階下へおりていらした。いつもどおり、ババを待っていた帰依者のグループには、カリフォルニア出身のゴールドスティン博士を含む数人の医師がいた。議論するまでもなく、ババは医師たちにすぐ私を病院へ連れて行き、必要とあらば手術をするように命じられた。

そして、コメディーは加速した。私たちは数台の車に乗り込み、ホワイトフィールドにあるババの婦人科の病院へ行った。日直のラジェーシュワリー女医は検査室を使えるようにし、集まった医師たちは、20 回かそれ以上私の尿管にさまざまなサイズのカテーテル〔尿道・気管等に挿入して液体を排出する細い管〕を挿入しようと試みたが、完全な失敗に終わった。医師たちが排出できたのは、ほんのわずかな血液だけだった。

私は口をつぐんで黙っていたが、今や苦悶にあえいでいた。医師たちが即座に下した決断は、腹部の壁を貫いて緊急の開口部〔穴・通路〕を作らなければならないということだった。しかし、このとき議論になったのは、（救急搬送で数分以内に簡潔かつ迅速に行わなければならない）手術を、ホワイトフィールドで行うべきかバンガロールで行うべきか、ということだった。この意見の相違があったためババに相談することになり、何人かの医師がババのもとへ相談に行った。医師たちは確固たる決定を得られぬまま戻って来て、問題は再び議論された。もう一度、今後の相談のためにグループでブリンダーヴァンへ戻った。信じようが信じまいが、このような往復が３回以上続いたのだ！ 最後の往復でババはじれったくなって、もし医師たちが合意できないのであれば、ヒスロップをバンガロールに連れて行く方が良いだろう、とおっしゃった。私がバンガロールの手術台にのるまでに、時刻は午後８時頃になっていた。スワミは２人のサイの学生を付き添いによこしてくださったが、もちろん２人は素晴らしい学生たちだった。その時点までの私の状況は想像できるだろう。私は口をつぐんで沈黙し続けていたが、自分がどこにいるのか、何をしているのかわからないほど苦しんでいた。緊急事態にやるべき仕事はホワイトフィールドであれば５分でやれたはずだった。しかし、そうする代わりに４時間もかかったのだ！ そしてさらにコメディーは続いた。

バンガロールでは、病院内の当直外科医たちがその仕事をしくじった。深刻な感染症が引き起こされ、３日以内にババは私をブリンダ―ヴァンへ戻すよう命じられた。それからババは、インドで最高の前立腺手術のできる外科医を捜し出してくださった。

私を診察した後、その外科医は思った。私の状況はかなり悪く、事実上、生存の可能性はないにもかかわらず、なぜ自分が不必要に致命的な事態を仕切らねばならないのかと。しかしババは、ババが一切の面倒を見るからと言ってその外科医を説得し、手術の日程が決められた。その後、ババは手配が終わるまで旅を延期していたが、あちらからでも私の困難に十分対応できると言って、プラシャーンティ・ニラヤムへお戻りになった。

ババは、ホワイトフィールドの病院、“シュリ・サティヤ・サイ婦人科小児科病院”で私の手術をするよう手配してくださった。ケアは素晴らしく、近代的な手術室で数時間に及ぶ手術が行われ、大勢の帰依者の医師や外科医が手術に参加した。私の腹腔内全体が悪性の感染症に冒されており、組織はかなり腐敗していたので、標準的な手術の手順を用いることはで

きなかった。主治医のバット外科医はこの時まで一度もババに会ったことがなかったが、自分は冷静で自信もあったけれど、振り返ってみればこれが驚くべき状況であることがわかった、と言っていた。女性医師たちは、手術の手順のいくつかの特徴は、サイ ババがそこにいて担当していることを示していたと言っていた。後から聞いたことだが、私は深い全身麻酔の中で２度ババがそこにいると言い、ババと話をしていたらしい。

手術が終わって退院するまで、その病院の女性医師やスタッフから受けたケアは素晴らしいものだった。この日課のケアは、私がブリンダーヴァンに帰ると男性医師たちによって引き継がれ、私が徒歩で旅行できるほど回復するまで続けられた。

この出来事全体の大がかりなコメディーの理由は何なのだろう？　その答えを見つけるのにしばらく時間がかかった。最初に私が不調を報告した時、ババは神の恩寵によってこの問題全体を修正できたはずであることを私たちは皆知っていた。では、なぜこれほど長い、苦渋に満ちた遅れがあったのだろうか？　なぜバンガロールの病院で、命にかかわるほど複雑な事態が起こったのだろうか？

ババはプラシャーンティ・ニラヤムから戻って来ると、毎日のように私たちのコテージ〔小家屋〕を訪ねてくださった。ある時、ババは全身麻酔がかかっていた時の私のコメントを含む手術の全貌を詳しく説明してくださった。私には生存の勝算はなく、手術の間ずっとババはそこにいてくださり、もし世界のどこか他の場所でこのトラブルに見舞われていたら、私は生きていなかっただろうとのことだった。最終的に、ババが訪問してくださった別の折に、私はその問題の謎が解けたことをババに伝えた。私の出した結論はこうだ。

私の寿命はすでに尽きてしまい、ババは私を最終段階まで下りていかせた。しかし最後の土壇場になって私に再生〔蘇り〕を与え、私の寿命〔自然死〕を無効になさった。ババはにっこり微笑んで、私の述べたことが真実であるとお認めになった。ババは私に新しい命をくださったのだった。

１月にメキシコの自宅に帰った後、いくつかの継続的な合併症が起こり、私はメキシコの病院に連れて行かれ、その後アメリカの病院に連れて行かれた。ババは、心配しないように、それらはただ再生の痛みにすぎません、との言葉を送ってこられた。

※ヒスロップ博士は 1995 年 8 月に他界。この時、17 年の命をババから頂いたことになる。